

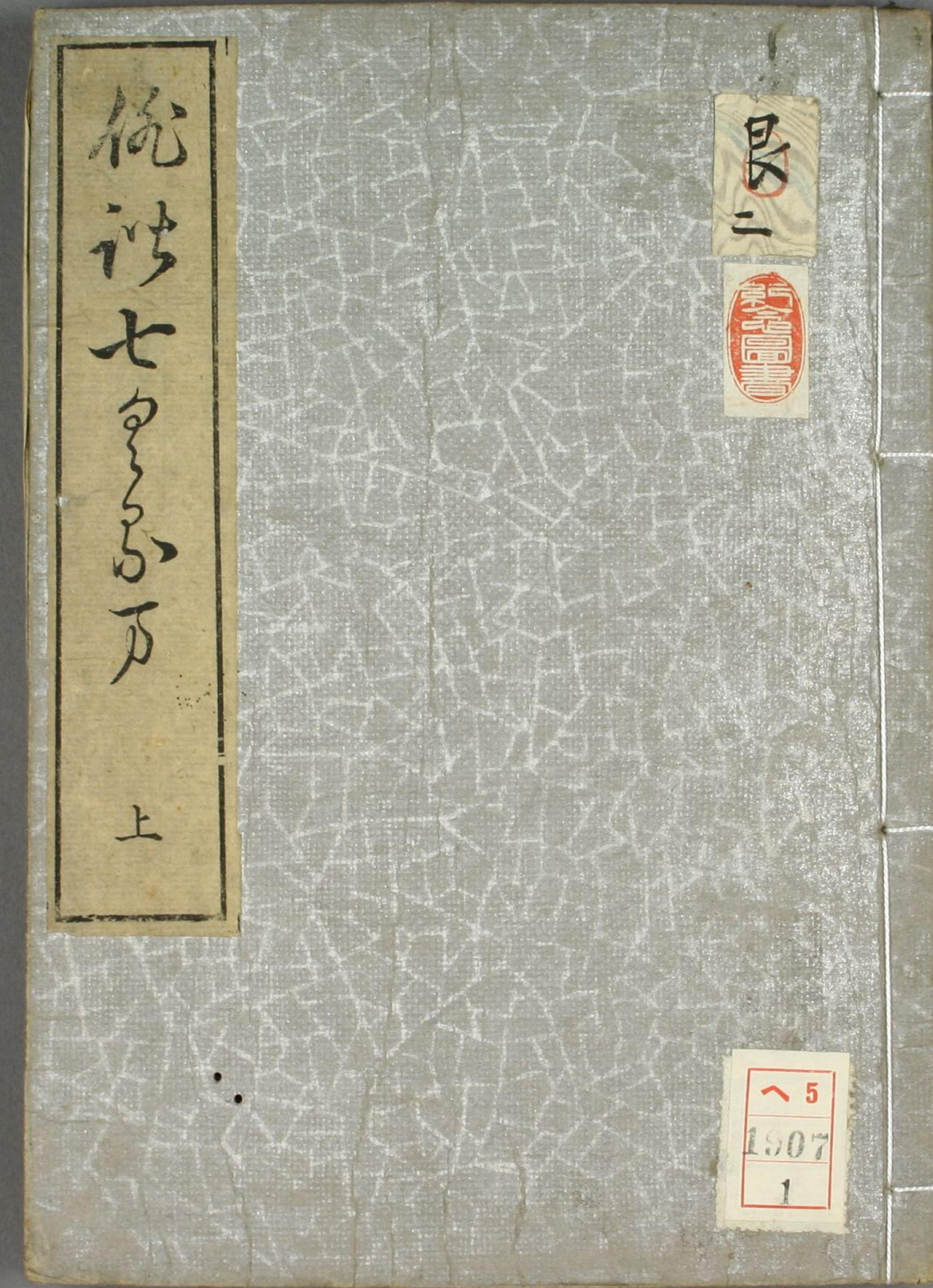
80

75

70

65

60





鬼母發句集

# 俳諧七車

攝都書肆 高橋興文堂梓



えふまめ抱るやづれまき刀をもつ  
りて指をもとく。天性のはくとんへあくえ  
う。いやしておもとよもお出で。そ  
ぞくたすとよき。もくタガキのまご  
うち。ゆめもととおもとよく。(補)とくの  
すゑひとまよあはざよくばれや、  
かの化乃ち變るもとよく。さくわ  
あたまのふなむを納ひのや。

イタミ  
えへとふるよ胞衣をぬる  
伊豆にあづかま流せとせん人ああた  
のづつ年よふれつかて、ハツモト

ホ

もくことくわがまうとくとゆく  
こゑをあめどくめのば、あくにて  
トカくしゆとくす、數あき十三年  
めにわいの翁をかむて、流をくもんと  
りまや。ゆきのまくはく（なま）

もくよせきく回る木の翁をくわく  
きうは泥河や、のじの翁をくわく、まく  
まくわく。たきなげざとくわく。  
えくひのとめくわのあくよ、花力  
わと訓あくわ。じくじく年よ及べ、わ  
きのらきのさのさくわあくわ、タまで  
て、くわくとくわく。因縁ぢやま流  
せのまくはく。わんきくわくとく  
よにくわくとくわく

月三

らあよまくおもふるな化を  
よふふんとまのむだまくらまく  
えもなうて、むかへゆひあまどしき  
れのれよりといきとなねむ母  
がくすくはくはくはくはくはく  
抑ナセキのじよとよかくして  
梓よちわがわくらが泥けのちわく。ね  
いのちわく。とくとくとくとくとく  
あり。又序や跋や。詞もや。アビリヤヒト  
アビリヤヒトアビリヤヒトアビリヤヒト

ヨシモトモロヨナガルノミンタムを  
ケモトモのヨリナリモトモのヨリナリ  
モホナニモナリモホナニモナリモホナリ  
モホナリモホナリモホナリモホナリ

わよつむ



は、ふす方全部百三拾餘丁ありて翁の自撰なり。是年  
揚芳堂これを以て。荒木氏と梓行せんとして。半ど黒字。  
其本は。荒木氏より蔵して。已ニ二紀より。先年京人中某  
より。抄して。句題を刻して。貰ひ。其集の翁の傳。とて  
之をせしれ。又。六抄せん事。其ほよあつまく。余うき  
梓行せ志哉。わざ。車ハ。必ず祖父が。も。川と彌  
て。翁も。次第が。う。代も。う。を。句など。其の集。抄  
も。教え。又。あはう。翁を。代せし。か。う。は。よ。ひ。か  
テ。う。き。う。翁を。と。し。う。某氏。は。托。句。遙。よ。公。せ  
を。除。き。え。翁を。わ。も。或。ハ。句。遙。よ。公。せ  
略。も。ハ。主。出。し。校。正。錢。を。も。り。某。木。氏。と。う。そ。う  
公。う。れ。實。く。ハ。京。か。と。か。べ。害。翁。は。復。き。と。い。ふ  
べ。一。翁。や。あ。業。を。う。た。つ。さ。主。顧。せ。よ。も。篠。ま  
きて。だ。ゆ。ぢ。師。恩。が。ひ。う。す。あ。り。う。れ

天明三年癸卯春

大坂興文堂書坊 高橋徳恒謹識

な、くる。丁寧の一

春。郊

歳。旦

善。ち。わ。一。是。此。才。う。ね。力。き  
れ。お。お。郊。山。よ。年。を。じ。く。そ  
い。ま。う。や。大。和。正。内。三。笠。と  
初。は。就。ま。り。か。う。れ。い。う。高。や。大  
大。ゆ。く。や。後。悔。も。又。ま。い。重。白。み  
猿。う。き。の。古。つ。ま。き。を。う。く。て

まへけえいそやかなみまくらは  
まくらはせおわらふまかのはれ  
門松やうへるやぬ武庫のよ  
火の数やうへる松竹まくらは  
六歳れ続をうねの花よせ  
まくらやまくらへるまくらまくら  
まくらまくらのあくと六歳まくらは  
かまくらまくらやまくらまくら朝れ元  
三十玉手がまくらまくら

花といそを売れるのかうす  
ともむし初日をもみとじやん  
や様よもみれののじやんを  
ゑ縁ひよやき初日れ様よる  
ひあけよゆて秋の田うぶせに  
は年えりまくら  
まくらはせおわらふまくらは  
まくらやまくらせおわらふまくら

祇園の社より

あらぬけもいまと事ふるをも

さうそとくのねいもれ  
神のまことえふく

うれきり千種をよみゆはめ

はくとくゆゑの

朝ひゆふうくとやま  
むもとく年めの尉あもち  
かみくちみの同里すみの花  
色力背よ満たほ乃あくわにふ

枝のゆれそよてゆくい顔休え  
御のゆのまごんたまこ花もまくまれ  
とくのだわくとくのまくられ  
梅や紅人のけもひれ初うえ

○已上早旦立下がまの列のうとうとく但  
句葉を出るハ咲き多

がれ丈焼よくとくはくうりうり  
ぬ月たり鐵卵懷舊迎游る鶴鳴り  
うますやぶさくはぐくれ候よ

内お猪ハねうしゆも才廣  
至の江も春をもねつて 本山

は速中ハ鬼堂才彦ホの福天馬西行  
万波瓶等セシナリ

トニ

お向ひておひるを考へてまふ  
子がため母の細き花を  
かまくら縁に横たわる時  
おもひすせば母も水うつ  
おもひてわが郡山の  
おもひておもひて

まう北の手にちゆうとせんと初冬  
おもひておもひて

う朝独り

アハほりおれあ／＼下宿おれが  
空石せ人戸是ゆのねのまもてま／＼  
え庵びあをまく人うあよおほりま  
えぬよおほり

物の本と名をもつたる所すま  
月あさと秋風通はゆうく  
うぬうやあ厚の里り緑ふく  
二月十五

小る降ふとくと倒の火影の  
居所を

初口絆

もれてますと

井戸堰をあらうやね乃もな  
むそく音便さう人のもん  
ぬれねほほーほほほほほほ

うきあそ内花香でなんや

おのの大捕え成れどよかえぬよ店も  
花を入るおもてのよに  
丸まのせうい花のよに

おもてのよに

二月サムロ情れよ  
サムロ情れよ

此れぬ又三行 やせるにちハ

すみせありそ石川立堅爰也  
以一枝得二根者大欲也

と文字までわざわざとおうじて  
うきをうけらうす

芽を生むやんまくのよし根子  
考め里に跡居て居るわうれい  
角筈の跡 まうとも枕乃花  
すくはまく原ねふくもまつみ  
そくはまくあめのおりはなまくよ  
生れおもむくと大ほほおもむく  
すまきりはなひ古あくを

わわよ、ほひうあうれはもく

上二

うゆやかの船ふねま帰かへつ  
お腕うでハ恵めぐ共ともの船ふねま歸かへつ  
せうがくあるの舟ふねをねうえをもく  
て舉あきよま工くわえねうのれいをくわ  
力ちからくそ其その脚あしよ居ゐてうかが  
うねうのうをあらへてうかが  
うね

月つきもあらうめふ花はなもまく

牡丹ばだん江戸えど止水しじ

あらうめふ花はなもまくしてまめサロ

うかほとよせ成し西吹うもひ乃  
折りたれんとて發可也

そくもれぞれも去成をアリモカ

正月サロチ森其は許一あらまつて日氏

西園一だくみにあらむ

先セアとあわてにはともまづふと  
えりあはせり大併のほんたる事に因うけ  
よアカシムにてをゆめあくわてをめ  
すくさくまくまくじてをのこぐら樹  
葉花白くわい唐はづくさの像をみてあら  
まどあらわゆく

雨やの梅も見ても金に

桜すくサエリササの拂拂くまかと

と柳川

梅残さる人をたのれ舞まうおみき

脚もなびく碎くの脚口まー

サクハナ付モテ五

樹の葉も風も音ノテ音や吹

うゆ園外人ハ吹きあら

王屏の梅はさくさあらあら

あれとておのまつを梅は鳥とて

これ里とて見

枝の花同様もまくさく酒引う

まく離とて見

新春乃ちをぬめ頬れを露く

我等もまことに

おまつはるはるの比又のう

放雪等行う

勇士よめをかきくらむ

うるすいのちをむけめちのこ

生産等あわわ

十のれどやせんね乃ふ

隆生四日

膝合を難の背中せと

うのはを柳

川

我等もまことに

春日のひりと

まつ髪うきと朝れ草のもりの

物相のえもん人よまくとてまほくえ

まくまくせせせせせせせせせせせ

せもとのえれよもじや

花乃旅うる

まくまくらかく

花乃旅うる

まくまくらかく

武士の敵こそなまされ記

到處の風流事

流説

先々の方とお幸サチトも

まつての男子まごけをもろひをも

和辯ハダシをも詮タマシとてきくとく 楽ラクのそれ  
そのうちちあがふたうだんせよとてきくとて  
ほきすうすくむかむかのいわむすもくそくとて  
扇おうぎよ扇おうぎをもくとておうくそくとてくらひを止め  
あくね六脇向ロクガキウカをもくとてくらひを止め  
いちれ日ま度ヒマツは後アフタの事モノ 深嘆シカク  
人の泪水ノホリをもかせ 鬼哭ケイク  
この老シロをもととよとよとあまの

茅柳マツヨの奥アオのアオのアオたね情チカラ  
もモととえあるせやよねせあ花ハナ  
伊勢の涼急エチノリョウスイのまよすのゆうて  
小國コクり脚タマせシテとシテ程シテは餘ハタ列リ  
せらごのセラゴノおもてられ旅リと  
き月ヅキから枕カシマをもとて即シテ

おモと紀モモとほゑもおモモ詠モモれ

人度ヒマツ景供キヤウ

白シロい葉ハの花ハ乃ノおもてモモる

蒸モモ火

生てアキルハ御一 壱乃る

初春 石町祐高主  
上野のうねえり

きうある達のあせらる も。も。  
きうまれまくおまくすうゆくれ  
六十枚よ龜ハ万年れど  
うきよ

參去を龜の山下わちの友  
そきて縁をゆうけま  
とくはまむかすふくすふく  
きは龜のあゆえ移よれ去日され  
月うけ千石をしやくれよ乃ひ

鳴極

尼啼てをのほくよもよのま

大麻の絵

貨貰てをのほくよもよのま

大坂を宿の水す納の

絵うふを

うれ、や扇拂よみが花

筋をとてやうと

うのまくひの袖不除氏ぞ

まな向うもよくよく  
裡のばれりに

かのまやの初枝らちく

小町の経

あらもあらゆもゆく行ゆ

すゑをえせる小町の経

かくはやくの奥の乃のものも

七十葉

ほく杖のあぢれよあゆゑも、すゑ

一切経生の経

ねくよく衆生よもて野の経

ねくよく衆生よもて野の経

八十葉

あらゆるをくふとせ肩乃ハ

ねくよく衆生よもて野の経

玉瓜の金をうしもりえ

月次の泥浴せよと  
わきのをくふとくふ

まよす人のをゆれ初まく

まの一周をとがひくの

ううやれゆくよせやさくよ麻

たまごとくの草の草生みをくもくれてあらそ  
まくまのうちんが根席をよがく

まうのやうに種あらをひてまか麻の花す  
麻の花ふれえに連ふ

伴丹鷺阜みゆ

むすきやそめそくとふのそ

みれ梅えの

さは枝面新まことんのふ

やれひまごり梅うなるあらを

佐川流翁あらそく

よの葉よ走よれ色あらそくのす

まちのまうせよ梅の花と

田舎者あがくらはよ漢を

やや小ほふぬもまくまくの枝  
あくの先せ八十才  
名をやく

は紅れ神代わく

ふ

椿

せきくらむくらうまくらう

鞍のよよ人おほくらもおほくらもくく

用立あら壯川えまよの花をかき

よよ漢をやくねくほくうきくう  
あああれとけ月ふもちかへる

美一傳ほづの伝

口ばくけふこくまく花ふくら

扇子うち候所は扇  
あひあひのせす無

七夕よ望す松原  
わゆとく

日十日もあくの  
お幸草や

そのとく るれども九十  
日サリの秋芳室一りて

雨水をし草むれ林下  
風の舞

あまよ桂うねる  
陰よ深きよ

元の花てゆめも海へ  
まいりくれ

ト時國形はの後人大きゆ有らるのを

蒙古ノテヨリ得シキ

面影おもていさみぬる乃花季  
うかほほのにれきをそひだすと  
のいへるるもるる  
れえやくと神め事ゆめあ  
彦乃魚り神り 花衣  
うきはくわくんせりめ  
おとくはくくわくくわくく

花垣おはなやきとも和之れハキル  
六川ハまつと叩く事と

何ぞうきくわ新せよ峰よす  
え圓めうひまくの筋とつむぎくまきの  
くらうれうそんうそんうそんうそんうそん  
はんうそんうそんうそんうそんうそんうそん  
をの後をうそんうそんうそんうそんうそん

月影やと風を吹のる聲もみう

うきくわとおのれのる

侍は國府中れ住へ龜川氏鬼を牋花の  
化きくわくわくわくわくわくわくわく  
かいげくわくわくわくわくわくわくわく  
右文臺才法 竪壹尺九寸横壹尺壹寸足ノ高サ三寸壹分  
金物打ケヤヌクセ板裏黒ヌリ○此句半葉夏  
物うふみま初夏りくわくわくわくわくわくわくわくわく

花桶

升よあらか付とやまくわ

木桶やと代乃名えの初

勇者ちや殺と山里不動の草庵よおまくわ  
よ入おれぞれまくわくわくわくわくわくわく

勇者ちよとくわくわくわくわくわくわくわく

まし力入相のみよ人よる

ら獨のくわくわくわくわくわくわくわく  
帝おとて底めくわくわくわくわくわくわく  
きくわくわくわくわくわくわくわくわく

もくわくわいなほはくわくわくわくわく

笑ふやとくわくわくわくわくわくわく

附 詠詠平外旅四季並載

岸宿や夕暮の汐干の淡いら

まよひの向う

水季内や化人の川もあれば  
え治川や新考立てうそふら  
相芦や波は入江のまみは

七車寺の二

夏部

寝ての時もあくとよきにあくま  
かくとよかれよきよ脇そよぎのよ

絆の西せへ

タとんは鮎の股弓の川漸くれ  
まもなく夏の地ハ波よ

梵天山を

白くすいふを味す/ お葉山

計下はう大和子はやと田う  
教算の

芝柏東武

田子石は木や教

えゆよをね

苦奈やみうを教め方の音

夏想

主の所でれうかわくわばくま  
城の主とさうの事とたる夜

改生と重身

松下井又うかよ木瓜

坂上青園をうそ小倉をうそとう

鳥の音えどもあて

おもと小食を残め脚

まをねはへ一時

鶴立あけや納はけま

麻をう

仲友の花亭はほの日出をうそとう

替ひよけの日出をうそとう

さうれよとまはきのすわを

はうよやま

タタカサ辛哉はあつたる多め轍  
有もあらぬとせよての事

正夫よえり

多子れども元也と水後  
山下に流るあたうきとてとく  
えす生とひやくは其勢もとく  
うそあるとおともとくにけり  
水よも勢てとるる乃花  
泥流のとくとく小根り

き物よ新をものめぬ味をもれ  
み方十萬金をあゆき給例まこと書  
轍士え白百丸各うちういて引ひよどる

佐木本とて猪壁え作うたる人庫足  
せきとくとくとくとくとく

所やそのほほのくや鳥帽子額

五月廿日雨をもとれハ

年あれハ度もなきとて立ちとて

水を身サる漢おのへ

おもと筋引

やう日れ固へいとくとくとくとく  
孝玄よもとくとく

主衣よもとくとくとくとくとく

ナニシテ  
カニシテ

九十一も二きよか それも衣  
事ふたまくを貯ておくる  
よしとくれぬ やまとにて 例・少々  
義信國が納ヨリ多  
お多きへのきもれいそ 乃立本立  
ちんかのほきあへて  
人のきくひそん

秋もまぬを人乃固れま

まゆうをとて

監人の様

加納まほのあらわす  
時より内臣よねまほ

まゆうや何も加納のまつに  
ヤ村や尋うて許ま あはれや  
まゆうのあらわす内臣よねまほ  
まゆうなへいなはえさん秋もやうて

鳥のせとよ見ま

鳥のせとよ見ま

第八種ま そ乃もゆのう  
金毛亭とて 橋とよ  
船をちりあひ玉のゆ  
るそ傳ふとゆて 橋の起てもろ

サウのゆを

とうう袖そひにきや 伴潤

一ノ段常念佛

あらゆるの心がめ、一の院

靈とて

やあやまくねよ そくくわれ  
大坂よ ほの錆をとくに それまとまへ  
てせらまよの匂うて あはるゝとれ  
さくは 木坂よ 開けてすれかう けうとれ  
しとあされよ まく

なつまれハ まはくとく

西月五三  
大坂の坂トヨア

玄子よ 創作和歌大坂五三

正夫うきさ障よ 佐てえよ まわきくま  
をぬよ うきよ 佐きの鳴ハ まのふかうよ  
むきくまくらればよ

えうまく 備前 さくも まわけ

岸聖次三郎ハ 三郎れふよ まく(?)  
まく(?)をあをあられぬえもまく(?)まく(?)  
まく(?)は初てうわう一曲よ まく(?)

御のたみゑよ せんよ お、初音か

おとせ

まく(?)よ うきじやの もまく(?)

えきうきのゆよ  
おはよ 聞了

おとふを およ里つ まく(?)

清かう新モリテ純清粁リ

弘や吹草まれてモソモソ  
底固め仰塵淡シ

風風のいとひぬく名前、うれ  
きもくほ女のた乃歌わくとくせの西方さよ  
花月

えちかみよゆきと  
まハヤミほそとぬくと、更衣  
思術う人のあをとて猶る云脣定

妻の袖もあくもそのむとけの行

きのくふきまきより

まよとて批把も放すよとぞん  
五方十三様な方豆うらとぞん  
十九日二おうれ

牛の袖ハシマリ めるの夏涼川  
まよとて批把も放すよとぞん

元

竹浦 オハツ猪の本ウ  
アヒトヒキセキスの素車

五月十九日尋鳥

トヨタカク人のうらやまし

不二

あまくめそらはさきやゑみちよし  
まほむをせうわくすもあそんむる。すり  
きのくの麻むかしやなぐれ外  
日ひひのうみゆくはがくは後

おいもぬちくわや神のかとれ子  
構のあくふくのまちに國の人義  
きちをもて富士山て花構と云ひ御殿の  
きをねぐら立つて花構のあくとて御  
とえうだ花構のあくとて御くちぢく法を  
よの祝ひを止め

禱よ今をひり乃くくわ經  
せせいかくを拵へて室を下とま  
くもて故はゆうもかはくがくく御  
うんちよおひよては勝は作まく高  
きうわ

風うなぐくうも夏のあくわ  
印月のまもるねをもりて  
おも、かくよんゆくや鞠あそ

是黄香二

床まく父よ骨おあくこうされ

てきうわに  
机あくよくおひておけ

いまとくや人の顔照る外坐

乳車まく人のよく  
サクヤ行はるよくおきよ

かわ

かわるひゆう

ひそひせよひくふをほれ  
人のよのよまうて晴て晴て

あらきわやかくぬよおほれ  
軽くうたうよ

旅立てもよのよもよ

海うやみよのまにやへんす

よまとよもよ

ま梅のとうよいも旅出ま

端午

夜までさきはる月の朝う  
ち水やい／＼な 碓比端そつ  
すの因流訪れ湖をもよおさん  
引かうおれとおだんそれ碑のみく乃里  
よか庵老翁の御室

まごくらむまお満をえ乃元

和月のまごんを

ちくは経よ修むを

ほくまれるよおれおちまく

詠の金さくじゆるよ  
かくわくわくわくわくわく 雜

らも乃歌作／＼金のト

春風とひる人は何の處うよ住むる  
ひ月をやすらめくあづま事とも  
えきとくゆくゆく月の初夜不<sup>レ</sup>  
うきくわくおののくまんおもふ  
うきくわくおののくまんおもふ  
うきくわくおののくまんおもふ  
うきくわくおののくまんおもふ

うきくわくおののくまんおもふ

うきくわくおののくまんおもふ

一礼一回

足行のなまくは前途ノイ友の轍  
小輪子よ小轍を

うきくわくおののくまんおもふ

うきくわくおののくまんおもふ

うきくわくおののくまんおもふ

うきくわくおののくまんおもふ

馬鹿の烟もあたさ彦の都

うきくわくおののくまんおもふ

うきくわくおののくまんおもふ

うきくわくおののくまんおもふ

馬鹿のあくに前めの轍

うきくわくおののくまんおもふ

うきくわくおののくまんおもふ

うきくわくおののくまんおもふ

うきくわくおののくまんおもふ

うきくわくおののくまんおもふ

老々ハヌコ

うきくわくおののくまんおもふ

うきくわくおののくまんおもふ

もきわくハヌ掃庭のなまくうれ  
そハ予う向うう先手主うて流布をう  
と或人ゆきもくもくとおちうかまくとあ  
すうれこれ終るくよれのくよれ  
ゆきをかうしやうて一句とおもふ  
うきくよもよもくかうて言ひうれ  
ゆりの夜空の麻れぬきびをありうる  
歌ふる夜空とおもひうる  
ねをねも神のゆくへるよめく

まむの糸をくくれぬ

さうのこゑよ屋のあす因桂のす  
凌霄や杖よ老齒もぬく門  
凌霄や桺乃圓扇のれお機門

内家移水

アラ役者 佐白一 日向の  
旅館や達をくわく朝くみ  
タチや山口とく乃都麦  
麦 ほくそや山口とく乃都白  
此句うれよとて先付至りす  
御の如うかきき麦を序おきて又はいも  
くの里人

なまくらをせど

秋行

アリ井戸八西瓜よまくらをせど  
あくらう

新もるや宇田の岩えり姫  
次ノ内ハ引十重名方を紛より  
あくらうとすとすもうまくこひはくら  
めていひを景けゆめお向慶乃月

隼室

アリ弓矢のれ風丸生

靈棚や坂ハ血ぬれて元あれく  
支枝氏傳は因神<sup>ミツシマノミコト</sup>  
出陣の日傳<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>を行<sup>スル</sup>  
まよめ鬼もちつ所<sup>シテ</sup>陣をか  
効御歎り<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>

協旅の縄をえども力失<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>

差無<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>ふ<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>見の付<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>

佛<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>も是<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>訓<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>余<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>らう  
多<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>が多<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>氏<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>の力<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>江府<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>を出て<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>仕事<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>  
代<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>主<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>セ<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>あ<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>とく<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>ゆき<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>

ミツシマノヒツヅク又<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>ヤ萬<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>乃<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>萬<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>の神<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>

利<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>役<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>事<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>ノ列<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>年<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>

八月十五夜<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>

秋<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>之<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>膝<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>よ<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>手<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>も<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>有<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>る<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>うれ<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>

年<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>の<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>人<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>も<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>あ<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>ら<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>れ<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>る<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>の<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>月<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>

を<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>も<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>か<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>く<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>猿<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>す<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>な<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>山<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>の<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>月<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>

月次<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>の<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>名<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>を<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>い<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>く<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>き<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>く<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>

主<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>角<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>

らう<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>栗<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>味<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>あ<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>る<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>事<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>の<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>う<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>れ<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>る<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>事<sup>ミツシマノヒツヅク</sup>

七夕

田の水の湯とあて口のまわら

九月十九夜の事と秋の宿はのとるをりう

はの内へて旅とくとく乃元

くはよほの野田某の宿うすよりて万  
葉まのめ風をとよて日とくかくうと  
あるしてとひくにとくに波まの河を

二里とく門よそい草子乃内

えの奥あそく森のえやうや

性死う舟舟のふゆよ  
もいてうる

秋晴くあく鬼つばせゆくやる

とくあく

いせんあきやとくすはせとる  
佛のえれ後龜をすかと思ふとま  
たひなうお株をとよやうくのむ  
とくまくとくま

圓あ

臨柿のまくまく

かハ園茶乃味もきやく

まくまくまくまく

冬ふゝ月の霜まくまく

九月をとるをりう

されどあれああああや四社のうち

奥の海とよきよ

花は内方をもといけよおアホの

いんしゆの秋

老母もよみがえりまくすよ

去年よ似てうなづかへ見て

猿猴の旅

ち所柿のそもあ、くとあわせよ

ややくお家旦懸

年よ豊ひきよむすてたまむとぞなれ、

まじこもまくく風ふくいつともく

あもきよ

ちつよそやお生のやんは秋もよ

きくよもひくよそくハ秋のそえ

せよよよよ  
ゆふふ

そくよそちのやよ季をねうれよ

きよよやあよよきを花はう

足附

あよよよ魚のけ日やあよよ有

詠歌秋のる句をよひかくとぞの  
くわよほよよ歌をうけよ

秋すみしりの月より満ちて  
七月の郭ふとよむ

かのじや涌崩<sup>よ</sup>きに向くまわ  
出で因ねれおまうりなぐら  
立まゆめくみにあら

ハヤシホコロは秋そめぬさま

八月十五夜

かひくをあやまつま秋か

モ陽

久遠や朝の夜くろえの月

独此志る詞 あるむ

早も暮れとてはせく  
そゝろなくになまくわ  
るるせんれひくたれをなむ

下四

城主國ちをほきよはくと宵  
せうくとくきて被代よも

とて連<sup>つづ</sup>けはれ秋のこゑ見る哉  
大せうくまへぬ付敷<sup>くわふ</sup>くふくはり  
かくそり彼代よも<sup>く</sup>草すくうあくと  
了<sup>り</sup>のほくとくとくとくとくとくとくとく

路通船院覺り

左のまほすとみ車めのめの  
ひりやうそやうう、船乃くれ

九月廿四日その因みに

水とくとく神玉をかどおハシルこ

芋もやみのアラヒムスル内

八月十九日水月次の

詠説身りよ

あすま改めほめつぬ望を仰ぐる

きとえ車のえづき

やまとをめよ入るかのとく

水とくとく言ふはくにたの廣のを

新家宅

もやうに火祭りはとあるこれ

九月廿四日のまわらに

萬とくとく詫なまゆ申みゆまし

み月廿四日

ほとくに起く因みにほくまくま

九月廿四日  
内さん人の脱モトキよくまく

宵立ちの月と

夕ハ圓ようちゆき  
後をほえ  
立秋  
秋立や花の初音れども  
日よろひをむ

秋やうわきりとお袖れふ柏

セタ

比よりそとくわやそみえくれ想

やえ

扇尾よみよまくは名よゆゑ

かく

覗くとて深なれとれなまし

九月十五日へ  
秋すよあゆ

秋のりやあてまくわく尾元が

十五夜十五日まき

去まゆる乃くよくわく日元が  
うとふ景まくや窓乃月

ぬなとせ而就くら意乃内  
玉病（とひぐ）とひぐとすの月え  
景（けい）はあよううとすれりるる  
か（カ）や月のそめを水若月  
只のれれゑたすりや月が生

昔（むかし）すよ

かゑとへるれれまき一月せきまくされ

人のあめりすくまくされ

ほそにつてわくわくのゑ

弱（よつ）かく東武名句歌引

狗（け）りのひ不（ふ）うなよ旅（りゆ）生（なま）れ

きもワ徐（ゆ）きとすをまきて

あるせとす

筆（ひ）と朝（あさ）の山（さん）

す及（およ）ういはく（しづく）とすを白（しら）とす

月（つき）す七月（しちがつ）のま月（まづき）とす

とすをま月（まづき）とす

代（だい）火（ひ）とま月（まづき）とす

火（ひ）とま月（まづき）とす

火（ひ）とま月（まづき）とす

中（なか）之（み）二（ふた）

わくれゑやせよありせこの魂（たま）

靈（れい）よ玉（たま）消（き）ぬほ（ほ）けよそ秋（あき）の魂（たま）

九（く）月（つき）八（はち）月（つき）よりく（く）す  
九（く）月（つき）あ（あ）く（く）や（や）を（を）く（く）の（の）秋（あき）を（を）

く（く）ま（ま）く（く）て（て）く（く）一（一）ス（ス）強（よ）し

まの秋れがほそハなづと高士のえ  
行秋やひづをかへてあやしひづ

翁ねふとてあきをと

まわらふ成るやう屋代ニよる  
はづくまよかて

秋立や高士をくろよ旅ゆ

理ゆとく人妻在てふ許すたすようて説得  
のか處なきよやすて併除國上内うちと  
うほよきぞく

秋をばあね旅や旅ふくろ

豎老菜子

そよとあて寂じるる麻浦

そよのまみる麻浦の

おどりを悔て

まよふとよそとよそとよそとよそとよそと

初秋

初秋や年がけつるおほきや  
る丸因幡屋のぼくよ用房をくもとくす

人あこりく事無本多とあてくす

秋を先に宿ゆとむ朝ちく

冬のまよ人のまよのまよのまよのまよの  
はづくまよんとまよに

御馬の道を経たる萬のそと  
よしもと本ありとアリの許を  
かねれどもすむきを  
す代わせや萬もまじめをくわ

五十駄

又あらえて走りをと乃秋

三室山東十三回焉

狹よむちつのもの若狭よき

セタ

七子山 あゆのまつとそよの紀

十七夜

一輪のうけめきん屋の山へ

門主とよを六十枚

妻もあやのうねり

麻のうへ渦よすいもほひ

佐川氏へ移すあらすと  
おまつてまつゆの匂とあらうよ

まのうへ入るわざむれのと

葉落とす

まのうへ入るわざむれのと

十七夜

考へよ。壁の秋の紅葉も奥志内  
五井氏ねき方のもちあつて旅立つる  
のちをむけよ一句をばうたす約束する人  
さんをきてとまくよ因りて竹  
笠とよすとひよす。旅の秋  
秋月の白い夜を旅先のうちおもひや  
ばの汀よまきちが  
ちわくまくまく。身のよはそ持をと  
きわくよアラセをとく。約束してあると  
あつまん

月影やや唐を階をもよみぬ  
小らぬものる

秋月の白い夜を旅先のうちおもひや

な、とみゆきしゆ

冬郊

かすげよ様のわざよおねぐら

腕力サ日あさうあが

通とくや伴約あさうのまく

多かる志内はるよゆく竹列

餅すやさう。筆書きのまく

初音

まよ(うけん)よひなすて戸をひく

冬

まほ優勢の船や島丸え廣ての海シママリ  
小笠の小舟の本様をて大旗を放て大勝シママリ

さと力シママリもかくえ旗工シママリヨ体力シママリ十強シママリ

のうそがひそむるを本と

おなづ月せう

さとねのうそは事ある

み、極乃身シママリあるうもれ匂いうれ  
ちうしめう強シママリ男シママリやともシママリも  
あふれひゆや耳シママリをゆく居シママリ  
ひくとねハそりを牡シママリ女

旅泊

は多くはよ太シママリおども太シママリ入

あくおとれハたまくシママリ休シママリ

猪シママリ十シママリ伊シママリ莫シママリ空シママリ

美シママリちうわくい初シママリうりとシママリかよ

かんと馬シママリのうなうとシママリそ枯シママリれ  
餅シママリはるあるとシママリとシママリかく

かく杵シママリと血シママリとシママリ餅シママリのぼとシママリ

早

車シママリそそく朝シママリやはよくら

上月在新宿中無事  
お二度の脚用替と仰る多岐行  
ゆきそにほやうねり升よされ  
ナ有る終終  
おまへとくも鐵列  
まちゆふ君の喰方やひつもく  
お年一月たゞ不及をま  
アおまく叶ふを  
仰かとけとせあるをそなえ  
き

年の多く

四下十三

新宿の多くはほくいすか  
年また一年の事とも言ふれど

年をさよいせらやまの花さ  
咲るあうと圓すよもんとくみの  
うめおもあうと見るは度ん  
年のはまくひよひくひく  
とくめ歌や歌の音詠も角田川  
人正月のやうすち／＼年の奥  
年の慶祝のよ業よばや鼓  
花むらうちいづよとせら年車  
年あせ奥乃ねくひるの群

轍

市より山房 答  
何を飾りよ飾り  
え給十五日未だ五日とて  
五十年忌口因文  
生れ死なれ死へたるの如き  
王白玉の御湯年々告げもま  
経月の方を入れ口用うた事もく  
又内金立てを本當とす

嘉月十三

喜びんと身を解  
身を解く人の心の如きにかく  
らゆあやしくと達也モヤハシニ  
せわ坊

麦苗の時つ湯を味類  
新芽すす麦芽開の説作もて多る事よ  
阿紗吉次就あまんが行つて  
狗引の花犯るや一枝の花

翠柏鳥

花をもむよアはははやちひ  
十百十の夜名  
お真のやうに多くを  
えむるよまむともちぬあれ  
をめあらひをまくらみあるもれ 才庵  
おまけ裏門ももさりすわ

月々十九日鬼次より手紙と御物のを  
さうせあひて奥より仕合ひとを  
しめん  
うふひそかにえまほく年之内  
十月十日作愁因義を事せんも身り  
タ内めどもつれをく 小六月  
や海の人をものむけのを

假汝やむるがくしてゆきは生  
窮き室主

とくひのて壁と窓と室と  
萬葉園とよみとよく人よ  
もるのうきもすり

その格よ所よてを以あくこよ  
オニウチヒムキノキモモトキモセ  
アヤシムシテ因えのまをもくへヌミ  
メヒキナヒと出立るよモクモサユ  
アリ メオモナヒ や松把のと  
一弓舉り

うほく九立みや や 先 植  
アリテウチヘ移る大林家の所後を  
植くは源をとよもくとくとくとく  
アヤシムシテ因えのまをもくへヌミ  
メヒキナヒと出立るよモクモサユ  
アリ 梅よ桂アキロキは和  
其う毎方正月をと

うあつゝ口以の捕もあつみ

江戸ノ社多門  
あをいはくよく破る

ちまよ移そく又ゆき い 花

旅泊

旅見るに方を旅猿めをあづれ

うるる

宿ゆくや宿おととせの旅車  
に至れりの秋をよむふ竹て布雲の路

うきをもむとよすすむ

春かや幸あらか乃花ふくろ

旅宿の森見よきをひて

あめくやするの夜の旅日

是大思え

叶つこそ陽よけやあらまれのふ

新葉をもむとよすすむ

さく夜紛を

うきはよともりやをのふ

まくをもむとよすすむ

もや陽のあらむを乃葉りく

題王襄

久の消ぬるの魂や厚きも

是因子騫

ううひくくくくす（すゑのと

年内にま二句

去まよかどもやうまむ年の内  
年を走むねし地の角旧の席

革を下す

あくまくゆく宿れ室の音

十月廿四日大森山勇はサギと洋て書け  
きた多くお世方をうち五中の部云とよ



鬼力發向集

俳諧大車

攝都書肆 高橋興文堂梓

